ダルシー氏溶透法則の k について

佐々木八郎

ON k IN DARCY'S PERCOLATION-LAW

Hachiro SASAKI

Synopsis. The theoretical and experimental studies on the coefficient of permeability in Mr. Darcy's law have been shown by many authorities. And the application of their formulae may be misused at times, for those forms resemble one another so much.

The writer, in this paper, classifies these formulae shown in the viscous flow, and states their relations, and adds a formula of his own to them.

1. DARCY'S LAW

地下水や濾過池の水の如く滲透する流れにおける水の平均滲透速度 $^{***}_{***}$ v_a は

$$v_a = Q/A \cdots (1)$$

にて示される。こゝにQ は流量,Aはその流過する総断面積とする。而して一般に層流 領域では著名な Darcy 氏法則(1856)の成立することが認められている。即ち,動水 勾配をIとすれば

$$v_a = k I \cdots (2)$$

こゝに、kは滲透係数と呼ばれるものであって、以下kを表わす諸式について記することゝする。

$$v_a = pv \cdots (3)$$

$$\frac{v_0 - v}{v} \approx 6 \frac{v_a^{0.2}}{d_w^{0.7}} \dots (4)$$

コムに

vo: 空隙内の最大流速

v : 空隙内の平均流速

^{*} 信州大学工学部助教授 (土木教室)

^{**} 所謂濾過速度とも呼ばれる。

^{***} 平均渗透速度と、粒子間の空隙内を流れる実際の流れの速度との関係は、筆者によればつぎの実験式で示される。(1)

2. k を表わす諸式

I. 記 号

1. 記 罗
$v_a =$ 平均滲透速度(所謂濾過速度) A verage percolating velocity through
porous mediacm. s-1
$k=$ 砂層の渗透係数 Coefficient of permeability in sand-bed ${ m cm.s^{-1}}$
$k_c=$ 粘土または沈泥層の滲透係数 \cdots
d =相均しい球形粒子の直径 \cdots cm
$d_a=$ ほゞ均等な砂粒子群の平均粒径 \cdots cm
$d_e = \! \sim \! -$ ズン氏有効径 Hazen's effective size of grain \cdots cm
$d_w=$ ツンカー氏有効直径 Zunker wirksame Korndurchmesser \cdots cm
u=均等係数 Uniformity coefficient
I=動水勾配 Hydraulic gradient
C=渗透層における粒子の性状,空隙量などに関する 実 験 係数 An empirical
coefficient depending upon the properties of granular materials and the
void-volume in porous media cm $^{-1}$ s $^{-1}$
c=渗透層における粒子の形,および空隙形に関する実験係数 An empirical
coefficient depending upon the shapes of grains and voids in porous
media····· $cm^{-2} \cdot g \cdot s^{-2}$
p =空隙率, $(p_0 = 有効空隙率 Effective porosity)$
e = p/(1-p) = 空隙比 Void ratio
t=温度 °C
ηο =標準温度 (10°C) における流体の粘性係数 Coefficient of viscosity of fluid
at standard temperature (10°C)cm $^{-1} \cdot g \cdot s^{-1}$
$\eta=t^{\circ}$ Cにおける流体の粘性係数····································
$ u$ =液体の動粘性係数 Coefficient of kinematic viscosity of fluid \cdots cm ² ·s ⁻¹
ρ = 流体の密度 Density of fluid
II. 空隙率を無視した式
A. 平均粒径型
$k = Cd^2a$

濾過池砂の状態

III. 空隙率を考慮にいれた式

A. 等径の球粒子層にたいする型

$$c_s = 10.219$$
 (理論値)

x = 空隙率の函数 (表-3 参照)

p	%	x	Þ	% .	\boldsymbol{x}	Þ	%	x
26		84.29					***********	20.30
	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •					4.2	**********	17.27
						43		15.96
	•••••						•••••	
							• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	
04		42.40	39		22.11	46		12.75

^{* 10°}Cに換算して Seelheim 式は

*** ヘーズンの実験範囲

$$egin{aligned} d_e &= 0.01 &\sim 0.3 ext{cm} \ u &= 1.5 &\sim 2.5 \ I &\approx &2 \end{aligned}
ight. d_e > 0.3 ext{cm}$$
 $d_e > 0.3 ext{cm}$ の砂礫層にはもはや適用できない。

こゝにヘーズンの有効径 d_e とは,大小粒子混合せるある土砂において, d_e なるものよりも 小さい直径を有する粒子の重量が、全土砂重量の10%となるような直径をいう。また d_{60} を、 これより小さい直径を有する粒子の重量が、全重量の60%にあたるような直径とすれば、 d_{60}/d_{10} なる比をuで表し、uを均等係数と呼ぶ。粒揃いの土砂ほどuが小さく、全部齊しい粒 子の場合は最小値 u=1である。

^{**} Laurence河 (Mass.)。の砂礫

B. ヘーズン有効径型

^{*} C_{ot} の値は Hazen の C_h (表 -2) と近似である。

^{**} do は鱗片状をした粘土粒子の直径であって,これと同じ沈降速度を有する球粒子の直径によって代表されている。粒子の沈降速度及び形の係数等については鶴見一之博士,土木学会誌, Vol.18, No.10,1932参照。

^{***} Seelheim(1880) の実験の結果に基いて Forchheimer (1901) が導いている。適用範囲は t=12°C, $e=0.665\sim0.50$ とされるが、(9) 式に比し、はるかに大なる値を与える。 Seelheim の行った実験は Terzaghi のそれに比して不完全であることが認められている。

c', m:粘土, 沈泥の種類, 有効径, 粒度曲線の形状により支配される係数。****

或は

$$k_c=17.4~(0.7\pm0.03~t)~(\frac{p}{0.45})^{-6}~d_e$$
2 …………特に $d_e=0.0003$ ~ 0.0012 cm にたいして……… $(11)'$

$$k = \frac{c_z}{\eta} \left\{ \frac{p_o}{1-p} \left(1 + \lambda \log u \right) d_e \right\}^2 \cdots \cdot (\frac{10}{4} + \frac{10}{4}) \cdots (12)$$

不揃ひの粒度の砂層にたいして実用的に

$$k \approx \beta \ u \ (0.7 + 0.03 \ t) \left(\frac{p}{1-p}\right)^2 d_e^2 \ \cdots (12)'$$

表-5 β (粒子の形の係数)の概値

	砂の種類	β
1	硝子球·····大阪	ķ140~180
2	円い滑かな砂丘砂	140
3	円い滑かな川砂	100~140
4	いくぶん角張った砂	80
5	角や瘤のある砂	70
6	稜の多いガラス粉末	60
7	かなり角張った川砂	50
8	扁平粒子を含む不整の川砂 //	40
9	極めて凸凹あって脆い砂//	30
10	泥のついた地下砂	20
11	.極めて角張った粒子の幾分リ ローム質を含む川砂	10

^{****} $d_e=0.0003$ ~0.0012cm, K=0.001~0.02m/day, p=0.30~0.60の間で行った試験では c'=0.301~3.595, m=7.96~5.36となっている。

^{*****} Hatch (1932) が Hazenの式を fine core materials の場合に延長した式である。 17.4の常数は粘土, 沈泥の性質, 粒度曲線の形状によって当然変化してゆくの である が, 最近似値を示す計算の手引きとなると氏は確言している。(11)′ 式は(9)′′′ 式 (粘土層) と (6) 式 (砂層) との中間値を与えている。

^{*******} cz は (17) 式参照。

 $[\]lambda$ は砂の粒度曲線の形によって変る数であるが、普通の砂層や細かい砂礫層 $(d_e < 3 mm)$ ならば $\lambda \approx 2$ として差支えない。沈泥や粘土が混入してくると $\lambda = 1 \sim 0$ 乃至稀に負の値を (10) とる。

表
$$-6$$
 $f(p) = \left(\frac{p}{1-p}\right)^2$ の値
$$p \% = 30 \quad 31 \quad 32 \quad 33 \quad 34 \quad 35 \quad 36 \quad 37 \quad 38 \quad 39$$
 $f(p) = .184 \quad .202 \quad .221 \quad .243 \quad .265 \quad .290 \quad .316 \quad .345 \quad .376 \quad .469$

$$p \% = 40 \quad 41 \quad 42 \quad 43 \quad 44 \quad 45 \quad 46 \quad 47 \quad 48 \quad 49$$
 $f(p) = .444 \quad .483 \quad .524 \quad .570 \quad .617 \quad .669 \quad .726 \quad .786 \quad .852 \quad .923$

$$p \% = 50 \quad 51 \quad 52 \quad 53 \quad 54 \quad 55 \quad 56 \quad 57 \quad 58 \quad 59$$
 $f(p) = 1.000 \quad 1.083 \quad 1.174 \quad 1.272 \quad 1.378 \quad 1.494 \quad 1.620 \quad 1.757 \quad 1.907 \quad 2.071$

C. ツンカー有効直径型

$$k=1350\ p/O^2$$
 …… at 10° C … Krüger … (13)
 $k=\frac{0.493}{\eta}$ $\frac{p}{(1-p)^2}$ $\frac{1}{U^2}$ …… (13) $\frac{1}{U^2}$ …… (13) $\frac{1}{U^2}$ …… (16) $\frac{1}{\eta}$ $\frac{1}{\eta}$ $\frac{p}{(1-p)^2}$ $\frac{1}{U^2}$ …… Zunker …… (16) $\frac{1}{u^2}$ $\frac{1}{u^2}$ …… Zunker — 田町 — Schönwälder …… (17) $\frac{c_z}{1-p}$ $\frac{c_z}{\eta}$ (13) $\frac{c_z}{1-p}$ $\frac{c_z}{1-p}$ $\frac{c_z}{1-p}$ $\frac{1}{1.3}$ $\frac{c_z}{2.2 \sim 2.3}$ $\frac{2.2 \sim 2.4}{2.2 \sim 2.3}$ $\frac{2.2 \sim 2.4}{2.3 \sim 2.3}$ $\frac{1}{1.3 \sim 2.0}$ $\frac{2.0 \sim 2.3}{2.3 \sim 2.3}$ $\frac{1}{1.5 \sim 1.7}$ $\frac{1.7 \sim 1.8}{1.8 \sim 2.0}$ $\frac{1}{1.7 \sim 1.8}$ — 円味を帯び、揃ったオーデル河砂 $\frac{9}{10}$ の $\frac{1}{1.7 \sim 1.8}$ …… 円味を帯び、揃ったオーデル河砂 $\frac{9}{10}$ $\frac{1}{10}$ $\frac{1}{10}$ …… $\frac{1}{10}$ $\frac{1}{10}$

* 0: 有効表面積=容積 1cc の粒子群の粒子の全表面積……cm $^{-1}$

U : 比表面 Spezifische Oberfläche

$$U = \frac{1}{d_w} = \frac{g_1}{d_{m1}} + \frac{g_2}{d_{m2}} + \dots = \sum_{1}^{N} \frac{g_N}{d_{mN}} \cdot \dots \cdot \operatorname{cm}^{-1} \cdot \dots \cdot (14)$$

たゞし d_m は (15) 式によって表わされる。

 d_{m1} : 篩目 d_o と d_1 とにはさまれた粒子群の比表面的平均径

g1: dm1 粒子群の占むる重量比

として

$$\frac{1}{d_{m1}} = \frac{0.4343(1/d_0 - 1/d_1)}{\log d_1 - \log d_0} - \text{Zunker} - (15)$$

或は

$$\frac{1}{d_{m1}} = \frac{1}{3} \left(\frac{1}{d_o} + \frac{2}{d_o + d_1} + \frac{1}{d_1} \right) \dots \text{Kozeny Biz} \dots (15)'$$
 $d_{m1} = 2 \quad d_o \, d_1 / (d_o + d_1) \dots P \text{öpel Biz} \dots (15)''$

****** 本式は粒径を含まない。土堰堤の滲透係数をみいだすー実験式である。原式は

 p_1 in %

 $K = c_{\nu}^{-1} N^{-7} p_1^{15} \cdots cm/min$

 $c = 4 \times 10^{-21}$;

 $6 - \cdots 0.0147$

7.....0.0143

(22) $k_s = C_s f(d_{20})$ Knappen …自然状態の土壤…(22) g.cm-1 s-1水の粘性係数 γ_{l} t (°C) η t (°C) 7 t (°C) η t (°C) η 0.....0.0179 8.....0.0138 16.....0.0111 28 0.0084 $1 - \cdots 0.0172$ 9.....0.0135 17.....0.0109 30.....0.0080 2.....0.0166 10.....0.0131 18.....0.0106 40.....0.0066 50.....0.0055 3.....0.0161 11.....0.0128 19.....0.0103 €0.....0.0047 $4 \cdots 0.0156$ $12 \cdots 0.0124$ 20.....0.0101 5.....0.0152 13.....0.0120 22.....0.0096 $70 - \cdots 0.0041$

 $14 - \cdots 0.0117$

15.....0.0114

3. 諸式の略説と関聯

24.....0.0092

26.....0.0087

80.....0.0036

 $100 - \cdots 0.0028$

Hagen (1869), Seelheim (1880)—(5)式, Hazen (1892) — (6) 式諸氏を経て, Slichter (1902-04) は、大いさの等しい球粒子層について、空隙率の観念をいれた (7) 式を示した。氏は,球の諸配列にたいする空隙を計算し,これを毛細管と見做し Poiseuille (1842) の法則に基き解析的に同式を誘導した。式中 $c_s=10.219$ なる値は理 論的に得られたものであるが,これより先 King (1898) は多くの砂について実験的に 10.31 なる数字を示している。つぎに Terzaghi (1925) は、砂層内水路の最大間隙は 最小のそれの5倍の巾を有し、従って最も狭い部の損失水頭は最も広い部のそれの25倍 であるなどの仮定を入れて半理論的に(8)式を示した。同式中,粒径に Hazen の有 効径を用いている。Krüger (1918) は砂層内の毛細管径を代表する大いさは,粒子の (13)(23) 大いさよりも等ろその比表面 によつて支配される傾向あるを認め(13)式を提示した。 Krüger の実験に用いた砂は平均 p=0.35 であるから同式中の f(p) を $(p/1-p)^2$ の形に変化すれば、(16) 式と近似のものとなる。Zunker (1920), Kozeny (1927) 両氏は Krüger の観念を基とする比表面乃至分散度をポ氏法則にいれそれぞれ式(16) (18) を誘導した。Slichter の c_s なる複雑な形の f(p) と Zunker の簡単なそれとの 間には、ほど $c_s/x=1.08(p/1-p)^2$ の関係がある。 もし Slichter の式に p=0.40 を仮定すれば水温 $10^{\circ}\mathrm{C}$ で $k=39d^2$ となり、Kozeny

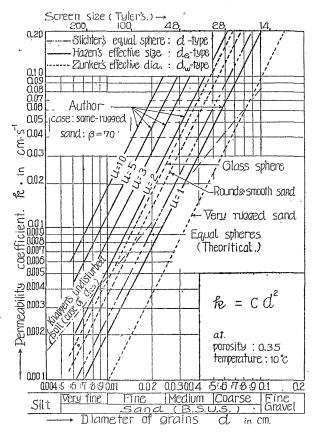
の式に p=0.40, $c_k=3$ (普通砂の形の係数) をとれば $k=41d^2$ となり,何れも Seel-

^{*} Kozeny はdimension 方程式を用いている。文献(16)参照。守島氏(24) も dimension 法によって滲透式誘導を試みている。

heim 系 (5) 式に相当する。また Terzaghi の式 (7) に e=1, 水温 10° C をとれば $k=(174\sim100\sim40)$ d_e^2 となり Hazen 式 (6) に似る。Seelheim と Hazen の両式 は似てはいるが前者は略と均等な粒径を有する砂群の平均粒径を,後者は所謂Hazen の 有効径をそれぞれ指している点相異るものである。もし Slichter や Seelheim の式に Hazen の d_e を用いるならば当然過少の値を示すこと」なる。またもし d_w 型の式に d_e を用いれば同様に通常過少の結果を示す。 d_e 型は簡便であるが,その欠点は粒度が不 揃いになると適用されぬことである。しかし筆者の (12) 式によるならば, d_w 型の信頼性をとり入れ,不均等度の著しい砂層にたいしても広く適用できよう。同式中 f(p) は便宜上 Zunker 氏のそれをとっている。図一1は空隙率35%(密詰め)水温 10° Cとしての d_e d_e d_w の三種類の粒径と滲透係数との関係を作ったもの である。各 粒 径に

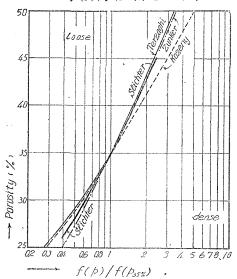
たいして三者三様の k を与 えているが,これは各粒径 がそれぞれ異る意味を有す ることよりして当然であ る。また同図において d_e を 等しくしても u が大となれ ば従って k が増すことはさ きに著者(12)式の示すとこ ろである。 d_e は比表面型の 一場合とも考えられようか。 例えば W.F. Hiltner に よると Boston blue clay の代表的試料についてみ るにその表面積の 50%が deより細かい部分から成り たっているという。一般に 代表粒径を d_x で表せばx%は土壌の一特性を示すもの であろう。 R. Glossop & A. W. Skempton (1945),

図-1 土砂の滲透係数と粒径



^{**} d_e と d_w の毛細管能の相違に関しては例えば文献(Σ 3)参照。

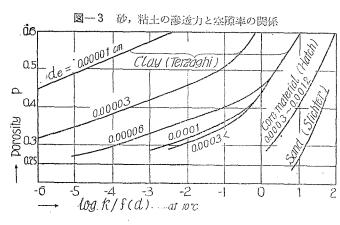
図-2 諸家のf(p) の形の比較 f(p)/f(p)35%) を以て表す



of entrance =0.414d と近似し興味ある数字を示されている。もし式中 d_v の代りに実用的な d_a を用いるならば C_t \approx 140となり,また d_{min} (残留する方の篩目)を用いるならば C_t \approx 200となる。空隙率を考慮に入れた 諸式の f(p) の形は諸権威者によつて討議されている。図-2は f(p)比較の参考に描いたものである。なお土粒子表面に密着している水、空気は水の自由透過しうる空隙をせばめている。従ってこれを全容積から差引いた有効の自由空隙率を p_o として分子pに代えるべきとして(17),

^{***} もしp>0.476となれば等球層の空隙形は一変し Slichter 式はその成立限界を超えるから (10)(28) (17) f(p) の形はこの場合寧ろ Zunker, Kozeny, Terzaghi が勝れると思われる。Donat, は 同一砂を用い,水温22°Cにおいてp のみを45.2~54.4%の間に変化させて測定し $p/(1-p)^2$ と $p^3/(1-p)^2$ を対照せしめ,後者の形が極めて一致することを示している。.

^{***} 空気を溶存する水の長時間濾過に於ては,砂層の有効空隙率を 逓減し著しく k を逓下するに至ることが認められている。また,土壌中のコロイドは著しい吸着力を有する。 Zunker 氏は中庸土に於て p=0.407, w (吸着率) =7.55, p_o =0.287, 重粘土に於て p=0.540, w=16.90, p_o =0.317の測定例を示している。



(18) 式が示されている。また(8) 式は p= 0.13 (empirical) に至れば滲透水の水筋が局部的に閉塞をおこしてう条件をいれてある。更に、粘土における(9) 2 式は、その鱗片状粒子間の隙間が、ある大いさ以下になれば水の粘

***** undisturbed state と disturbed state とでは同一粘土でもk-p の関係は異る。 天然土壌の滲透係数測定については例えば文献(26)(30)参照。

Terzaghi は粘土層の k は内部摩擦の変移と time-flow の影響をうけることを乐し、kは土壌厚にも関係することを注意している。

性が急に増加するものとして式中に係数mと常数0.0166の項を含ましめている。(9)と(8)における粘土と砂のCの比が $1:90\sim1:20$ という大きな相違は,両者の水筋の形状と性質とが本質的に異るためである。

なお,表-7の c_2 の値は一は空気を,一は水を流過せ しめ て得た係数で両者殆んど . 相等しい。即ち一般に η に気体の値を与えるか液体の値を与えるかによって同一の c の値が気体の渗透係数にも液体のそれにも適用しうる。水の粘性係数は表-9に示す如くであるが標準温度を 10° C にとって f(t) はほ $\times 0.7 + 0.03$ t によって代表される。

表-10 齊粒子層における限界流速 cm.s-1 (20°C)

空隙率	粒子の直径 dcm								
þ	0.01	0.02	0.05	0.1	0.2	0.4	1.0	2.0	
0.25 0.30	46.2	23.1	9.3	4.6	2.3	1.2	0.5	0.2	
0.30	36.0	18.0	7.2	3.6	1.8	0.9	0.4	0.2	
0.35 0.40	29.6	14.3	5.7	3.0	1.4	0.7	0.3	0.1	
0.40	23.1	11.6	4.6	2.3	1.2	0.6	0.2	0.1	

Mc Curdyによる:Tolman "Ground Water", p.198 より

表-11。天然の地下層における平均流速の測定値 cm.s-1 (但し I=100%)

沈泥,細砂, loess 0.0005~0.025 0.002 砂岩,中砂 0.025~0.05 0.04 粗砂,砂質礫 0.05~0.2 0.2 碟 0.2 ~1.0 1 碟層内最大流速 de = 0.185 4	土壌の種類	d······cm	平均流速	cm.s-1
Divide) delegations	砂岩,中砂 租砂,砂質礫	0,025~0,05 0,05 ~0,2 0,2 ~1.0	0.04 0.2	

Tolman "Ground Water", p.199 t b

4. ダルシー系諸式の適用限界

Terzaghi博士 (7) は $d_e = 0.01 \sim 0.13$ cmの砂で齊粒,混合粒,ゆるづめ,密づめ諸状態 で水を上から下へ、また下から上へ $I=0.5\sim5$ の間に変化させて実験の結果 $d_e=0.01$ \sim 0.05cm ならば例外なくグルシー法則に従うことを認めている。 鶴見博士 $^{(19)}$ は $d_a =$ $0.015 \sim 0.050$ cm の浜砂について I < 1 ならば凡てダルシー法則の成立するを認めてい る。C. Piefke 教授 (1886) は粗砂ならば0.06 cm. s-1, 複微砂ならば0.008cm. s-1 ま でをダルシー法則のあてはまる最大流速として 著名の図 (Prinz,Handbuch der Hydrologie 参照)を示している。King(1897)⁽³²⁾, Baldwin-Wiseman (1905) ⁽³³⁾諸氏 によれば、多孔質砂岩や極微砂では I が減少すると k が逓減するを認め、また之と反 対に U. Masoni氏(1896)は粒径0.037~0.0555 cm の火山灰では *I* を10に増せば k は却って低下することを観測している。 Zunker -田町氏(1931) $^{(13)}$ は I が増す と k が僅か増し、ある最大値に達すると k は却つて減少することを認めている。管内 の流れにおいて、層流から乱流への変移状態は通常 $R_e > 2000$ になれば急転形を画く **
が、滲透の場合はdの意味は少しく異るけれども $R_a=1\sim10$ にて滑かに遷移することが る。それ以上の領域では一般に $I = \alpha v^m + \beta v^n$ の如き関係が成りたち Kröber (1884) Forchheimer (1914) Smrecker (1914) 等諸氏の指数公式が示されている。表一10は Mc Curdy 氏による砂層内限界流速を換算して示したものである。また**表**-11は野外 における大凡の滲透流速である。両表を対照してみると I < 100%ならば $d = 0.2 \sim 0.4$ cm (v=1cms-1) 以下の粒子層では殆んど乱流は生じないことになる。もし之に従う ならば地下水流は通常は層流である。しかし汲出井においては容易に 1>100 %状態と なるからそのようの場合には前掲ダルシー系諸式は適用限界外に出でよう。

咸 譲

終りに、懇篤なる御指導を賜った鶴見一之博士並びに工学部長結城朝恭博士に謹んで 感謝の意を表する。

^{*} $R_{ec}=12,000\sim14,000$ 附近が限界流速とされる。

^{**} 粒層における $R_e=vd/\nu$ の d は、 d_s を Tyler 篩で s番と s+1 番との径の平均、 n_s を $4d_s$ の砂粒の数とすれば、 $d=\left(\sum n_s d^s_s / \sum n_s\right)^{1/s}$ なる平均粒径によって示す。

参考文献

No.3

- (1) Takasaki and Sasaki, Tech. Rept. of Tōhoku University, Vol. 15, No. 2, 1951. 佐本木八郎, 水道協会雜誌, No. 207, 1952.
- (2) Seelheim, Zeitschrift für Analytische Chemie, Vol. 19, 1880.
- (3) Forchheimer, "Hydraulik", s.53,1930.
- (4) Hazen, Allen, Mass.S.B. of H., 24th Ann. Rept., 1892.
- (5) Prinz,"Handbuch der Hydrologie",s.174,1919.;(3)s.60; 原著はSlichter, Charles, U.S.Geol. Survey, 19th Ann.Rept., 1897—1899.
- (€) Lacey, "Hydrology and Ground Water", p.3€,192€.
- (7) Terzaghi, "Erdbaumechanik", s. 119, 1925.
- (8) Do.s. 121
- (9) Hatch, H.H., Pro. A.S.C.E., Vol. 58, p. 1301, 1932, Vol. 59, p. 1167, 1933.
- (10) Sasaki, Journal of Shinshu University, Vol. № 1952.;
 佐々木八郎, 土, 粉体, 粒体連合講演会, 同報告, p. 25, 1952.
- (11) Krüger, E., Internat. Mitt. Bodenkunde, Bd. 8, 1918.
- (12) Zunker, Journal f. Gasbereuchtung u. Wasserversorgung, 1920.
- (13) 田町正營,農業土木研究, Vol. 3, 1931; (Schönwälder, Der Kurturteckniker, 31, 1928.)
- (14) Terzaghi and Peck, "Soil Mechanics in Engineering Practice", 1948.
- (15) Kozeny, J.S., Wasserkraft u. Wasserwirtschaft, 22, 1927.
- (16) 田町正營, 農業土木研究, Vol. 5, 1933.
- (17) Donat, J., Wasserkraft u. Wasserwirtschaft, 25, s. 225, 1929.
- (18) Fair & Hatch., Jour. Amer. Water Works Assn. Vol. 25,1933; Tolman, "Ground Water", p. 205,1937.
- (19) 鶴見一之, 土木学会誌, Vol. 18, No. 11, p. 1125, 1932.
- (20) 合田健,川島普, 第8回土木学会講演会, 同概報, p. 22, 1952.
- (21) 吉永齊, 第6回土木学会講演会, 1950.
- (22) Knappen, T. & Philippe, R., E.N.R., Apiril-9,1936.
- (23) 佐々木八郎, 仙台高等工業学校紀要, No.16,1942. (第4回土木学会講演会,1942.)
- (24) 守島正太郎, 農業土木研究, Vol.14, No.3, 1942.
- (25) Sasaki, Journal of Shinshū University, Vol. №, 1953.
- (26) Tayler, "Fundamentals of Soil Mechanics", 1950.
- (27) Tolman, "Ground Water", 1937.
- · (28) · 吉田彌七, 土木学会誌, Vol. 17, No. 6. 1931.
 - (29) Terzaghi, C., "Soil Physics" 1928; Cox, B., Pro. A.S. C. E., Vol. 59, p. 841, 1933,
 - (30) 田町正誉, 土田武夫, 農業土木研究, Vol. 8, No. 4, 1936.
 - (31) Muskat, "Flow of Homogeneous Fluids through Porous Media", 1937.
 - (32) King, F. H., U.S. Geol. Survey 19th Ann. Rept., 1897-99.
 - (33) Baldwin-Wiseman, M. Pro. I. C. E., Vol. 165, 1905-06.
 - (34) 本間仁, "水理学", 1952.